

随想

サクラの好みは一重から八重へ

田中 潔

マラッカ海峡を見おろす丘の上に立った。赤道まで、もう一步。足元の影は見えないほど小さい。廃虚となった教会の建物の壁に大きな棺の蓋がたてかけてある。ひとつずつ見ていくとドングリの模様があった。これはコルクガシのドングリであろう。

マレーシア最古の都市マラッカは東西貿易の中継地として栄えた。戦略的要衝でもあった。そのため植民地獲得抗争の的になり、1511年ポルトガル、1641年オランダ、1824年イギリスと、次々に支配が代わっている。

墓の主は1659年になくなった。ポルトガル生まれ、マラッカに来てコルク商を営み、一代で巨万の富を稼ぎ出した、と私は想像する。ポルトガルが世界のトップの座を譲らない林産物はコルクである。現在でも、ポルトガル一国だけで、世界中のコルク生産高のほぼ半分を占めている。

墓の主は、ポルトガルがオランダに破れた後も、18年間この地に残り、そして、ここに骨を埋めた。ドングリの図は故国のコルクガシの林を夢みるようにという縁者の願いであろう。

マラッカ海峡を見おろす丘が冒頭に出てくる小説は、大仏次郎の『帰郷』。第二次大戦では、日本軍も一時期マラッカを手の中におさめた。敗戦の気配が出はじめているのに、ヒロイン・高野左衛子は着物姿でこの丘を歩いている。行き交う人が振り返る。

「きれいなものは、風俗の違う国へ行っても、きれいに見えることは、間違いがない」

「小野崎さんはお口がお上手だから」

高野左衛子にとっては、ダイヤモンドの買い集めが目的で、この廃墟は興味のないことだった。それでも、散歩の最後には、案内をしてくれた小野崎公平に、

「でも、いいところね」

と言葉をかけている。何を見て「いい」と言ったのだろうか。棺の蓋のドングリには視線も投げなかったであろう。



写真1 ドングリの絵がある石棺の蓋

主人公・守屋恭吾が外地から日本へ帰り、友人と鎌倉・円覚寺周辺の桜を見て歩くところがある。表題『帰郷』を象徴する場面だ。

「いや、気がつかなかったが、桜の花っていうのは、やはり、美しい」

「……」

「年をとったのだ、俺たち、桜がきれいに見えるようになったのだ。桜、桜、と言うが、俗悪で、つまらぬ花だと思っていたがなあ」

「花と、人間の年齢とは、あまり関係ないだろう」

「いや、そうじゃない。若い内は、花を見ることを多分知らずにいるのだ」

高野左衛子が桜を見るところは出てこない。守屋恭吾は、

「若い内は、花を見ることを知らずにいるのだ」

と、左衛子にこそ言いたかったのではないか。

若い時から桜の花を美しいと感じる人もたくさんいる。井上 靖の『化石』に登場する女性は、小学校の一、二年生の時に桜に魅せられている。

「私が疎開しましたのは伊那市でございます。近くに高遠(たかとお)という町があります。そこの城址の桜は有名です。千何百本かの桜の木がありまして、それがみんな花をつけるのですから、その美しさと申しましたら、何と申しましょうか。——戦争中ですから、ほとんど人はおりませんし、しんとして凄いようでした。もう一度見とうございますわ」

フランスの富豪と結婚してマルセラン夫人となったこの女性を、作者は『化石』の主人公・一鬼太平治にこう言わせている。

「マルセラン夫人の横顔が眼に浮かんだ。美人ではないが上等だなと思った。女性に対して、上等だなという感じを持ったのは初めてのことだった」

一鬼の年齢は50代半ば。会社経営に明け暮れ、桜を美しいと感じる余裕はなかった男である。旅行先のパリで十二指腸がんと宣告されてからの1年間、死との対話を自分の内部で執拗に繰り返す。友人夫婦とその友達のマルセラン夫人、そして、一鬼の4人は、ブルゴーニュ地方を旅して歩く。

「高遠の桜が美しい」

とマルセラン夫人が言ったのはその時である。帰国後の一鬼は、高遠の桜を一緒に見て歩くことが心の支えになる。

「マルセラン夫人と信濃へ出掛け、その旅が終わるまでは、何としても今のままの状態でしたかった。その旅が終わったら寝ついてしまってもいいが、それまでは、このままにしておいてもらいたかった」



写真2 八重桜の名品:普賢象

高遠の桜はコヒガンザクラの一種「タカトオコヒガン(高遠小彼岸)」である。コヒガンザクラ類はソメイヨシノ(染井吉野)と同様に、一重の桜。やや天狗巢病に弱い。桜の花を美しいと感じる感性は、年齢には関係がないとしても、一重と八重の好みは年齢とともに変わってくるようだ。桜の品種数では全国一を誇る『八重桜の里(北海道松前町)』へ毎年通っている。

だんだんと八重桜がいいと思えるようになってきた。杉浦日向子『江戸アルキ帖』には、このへんのことが書いてある。

[天保十三年三月二十三日 <晴れ> 関屋の里]

関屋の里へ入る、と、なんと、八重桜の花盛りだった。悪くない。いや実に良い。もう少し若かった頃は、椿も梅も八重咲きが好きじゃなかった。清楚な一重に比べぼってりと厚化粧の感じがした。今見ると、まるで印象が違う。かわいいのだ。茶屋の少女にもたれかかるようにして下がる重たい花房が一生懸命の感じがして、いとしかった。芭蕉をひとつ。

・・・さまさまの事思ひ出す桜かな。

『江戸アルキ帖』は、散歩指南の本である。指南役がいるらしい。検定試験もある。昇級の目安は『江戸の粋(いき)』を感じられるかどうか。その極意は、どこまで、ぼんやりできるかである。

[嘉永二年三月二日 <晴れ> お茶ノ水]

神田明神前の水茶屋で半日ぼうっとして過ごした。ずっと前から、こんな風なことをしてみたいと思っていた。・・・金平糖一皿を相手に時間をつぶす。金平糖を一粒ずつ、間近に眺めては口へポイ。何もすることがないからぼうっとしているのじゃない。今こうやって「暇」をつむ

ぎだしているんだ。髪の毛の先まで、足の裏まで、ひたひたと満たされていくのがわかる。とろりとした時間が過ぎていく。

著者・杉浦日向子は、江戸散歩の達人だと思っていたが、散歩検定では、まだ3級だという。私などはせいぜい入門級だろう。NHKの番組「お江戸でござる」の解説者を勤めていたが、2005年没。彼女を指南役にして、散歩をしたら、こんな指導を受けた違いはない。

「ドングリの形なんか、どうでもいいじゃない。桜の品種がどうの、病気の罹りぐあいがこうの。あげくのはてには、ルーペを出してきて、めしべに毛があるとか、ないとか。ようするに、あなたの散歩は、うるさいのよ。分かる」

「少し分かる」

「分かってないのよ。桜の下をね、ぼうっと歩くの。高野左衛子が『でも、いいところね』と、散歩の最後に言ったでしょ。それでいいの。あなたは、すぐに『それじゃ、どこがよかった』と切り返えすでしょ。だからだめなの。マルセラン夫人と歩きたいなんて考えている間は、検定試験なんて受けても絶対に通らないわよ。いるわけじゃない、そんな人。なってくれと頼まれても、きっと、迷惑ね。指南役は他の人に頼んでね。

(公益社団法人 大日本山林会)



写真3 八重桜の名品:福祿寿